

大井九条の会 平和の集い

平和への思いを語る会

朗読劇

「反戦平和の詩画人 四國五郎」

～時代を超える絵と言葉の力～

原作 四國五郎・四國光 脚色 田村嘉浩

『おこりじぞう』という絵本があります。広島原爆のことを描いた本で、幼い子が亡くなってしまうお話です。その絵を描いたのが四國五郎さんです。絵と詩で、反戦平和と戦争の記憶の継承を一途に訴え続けた方として知られています。2024 年はちょうど生誕 100 年、没後 10 年でもあり、国内外で再評価が進んでいます。

今年は、戦後 80 年、被爆 80 年に当たりますが、「戦争の記憶」は時とともに薄れつつあります。大井九条の会では、絵本『おこりじぞう』の朗読や、四國五郎さんが残した詩と絵を通して、戦争や原爆の実相、そして戦時下の人々の生活や思いについて考える会を催すことにしました。多くの方のご参加をお待ちしています。



四國五郎(しこくごろう)

1924 年広島に生まれる。画家・詩人。20 才で徴兵され、満州で従軍。敗戦後は3年強の間シベリア抑留を経験。帰国して愛弟の被爆死に直面。以後、生涯をかけて、反戦平和のために絵と詩で膨大な作品を描き残す。絵本『おこりじぞう』の絵が広く知られている。2014 年没。

I 部 朗読劇「反戦平和の詩画人 四國五郎」(60 分)

II 部 平和への思いを語る (参加者のみなさん)

日時: 2025年8月23日(土) 14:00～16:00

場所: 大井町生涯学習センター2階 第1～2 会議室

参加費: 500 円(高校生以下無料)

主催 大井九条の会

連絡先 0465-83-5875 田村 0465-83-2358 二上 (大井九条の会事務局)

「戦争を起こす人間に対して、本気で怒れ」

私が小学生の頃、外で気に入らぬことがあり家で癪癪を起こした時、いつもは穏やかで優しい父が、真剣な顔で、まるで成人を諭すようによくこう言った。

「つまらんことで怒るんじゃない。つまらん人間は沢山いる。だけど世の中には本当に悪い人間というのがいる。それは戦争を起こす奴だ。戦争は台風や地震みたいな自然災害じゃない。人が起こすもんだ。もの凄い数の人間が不幸になる。だから、つまらんことで怒るんじゃなくて、戦争を起こすような、本当に悪い人間に対して、本気で怒れ。」

小さな子供相手に、このようなことを当たり前のように言う親も相当珍しいのではないかな。

今考えると、父は自分にとって背骨のようなこの価値観を、子供が理解しようがしまいが、とにかく小さいうちに手渡しておきたい、そういう強い思いがあったのではないかな。

戦争は自然災害ではない。必ず、特定の極めて少数の人間が決断することによって、引き起こされる。その行為だけは、人間として絶対に許してはいけない。これは人間としての大原則だ。父の人生は、執念のような、この揺るぎない信念に支えられていた。

父が亡くなった今、この言葉を私に語りかける時の父の真剣な目を思い出すと、父の生き様は、この言葉をそのまま体現したような人生だったと、改めて思う。

(「四國光著『反戦詩画人 四國五郎』はじめに「戦争への怒り」より)



75歳の四國五郎

四國五郎 しこく・ごろう 1924年、広島県生まれ。20歳で徴兵され、満州で従軍。敗戦後3年強のシベリア抑留を経験する。1948年11月に帰国後、峠三吉らとの「われらの詩の会」による「辻詩」や『反戦詩歌集』『原爆詩集』に絵や詩で参加。「広島平和美術展」の創設に携わったほか、NHKの「市民の手で原爆の絵を」運動に協力する。作・山口勇子／絵・四國五郎の『おこりじぞう』(1979)はロングセラー。著作に『四國五郎詩画集 母子像』(1970)、画文集『広島百橋』(1975)など。

現在のバンクシーのような「辻詩」の活動

幼い頃から絵の才能を発揮してきた四國五郎は、美術学校に進む夢を戦争で断たれた。戦後は広島市役所で働きながら平和運動に参加。1950年の朝鮮戦争前から、峠が入院するまで約3年間、『辻詩』(つじし)と題して、主に峠や四國や若い会員の詩を使い、四國が一枚モノの手書きの反戦反核ポスターを150-200種類近くを作成した。「われらの詩の会」の若者達が手分けして、四國が仕上げた辻詩を市内のあちこちにゲリラ的に貼りだし、警察が来るとはがして別の所に貼るということをくり返す。GHQが厳しい言論統制を敷く中、当時としては逮捕覚悟の反戦活動だった。現在で言えば、バンクシーのようなアート・アクティビズムの活動だった。



残っている辻詩 (反戦反核ポスター) の一枚

(Wikipedia 等より)